

森の幼稚園訪問<Stenløse Skovbørnehave>

<遊びと保育士の役割>

P.I.C. Leder Ms. Charlotte Norgren

(シャロツテ・ノアグレン)

レポート：竹村恵子

★はじめに

1960年～1970年代のデンマークの子育てでは、家庭で母が子育てをすることが中心でした。「子どもを自然の中の遊びに行かせたい」という母たちの思いから、自治体が制度を作り、独立法人として森の幼稚園が始まりました。バスで各地域を回りながら子どもたちを集めて森に行こうという森の幼稚園があったり、園舎型の森の幼稚園があったり、形態はさまざまですが、自然に触れる体験を子どもたちに与えたいとねらいをもって設立されました。

★スティルス森の幼稚園の概要

子育てをする保護者によって、一般の保育と違う形でスタートした森の幼稚園。当初は、保護者+保育士1名でスタートしましたが、次第に形が変わり、現在は5人のスタッフ、リーダー1人の体制で保育を実施しています。

園児数：30名（3歳前～0学年）

保育時間：9：00～15：00

保育場所：森（いろんな遊びの目的で数か所の森を転々と移動します）

保育内容：子どもたちは、いろんな起伏が激しい谷や坂で、ロープを投げて遊びを繋げ、運動神経を高めていきます。学術的な調査でも示されているように、運動能力が高まることで、学びの力が高まります。子どもは、わからないと保育士に助けを求めます。保育士は必要な助けに対して一緒



<体験することを大切にしている>

に伝えることが大切な役割なのです。ナイフなどの道具の活用は、使う際は必ず大人がそばにいるというルールが守られれば、4歳からナイフ等を使ってもよいのです。また、子どもの遊びや活動を園長がすべて決めるのではなく、それぞれの保育士が子どもの状況を評価し、あそびを展開しています。

★園長先生のレクチャーより

組織の中でできること、それは子どもに関することのいいアイデアを保育に活かすことです。保育士自身、どのような経験をして育ってきたかで、子どもに与える影響は大きいとおっしゃっていました。

10年間ごく一般の保育園の園長をされてきたそうですが、活動をしていた時、自然との交流が薄れていると感じ、ボーイスカウトの指導もしていたため、広い所で思

いっきりに自然の中で保育をしていきたいと思ったそうです。

森の幼稚園での保育を実践することで、喧嘩も少なくなる、男女なかよし、あそびの中で学んでいる姿が見られることを実感していると力強く語られていました。待機児童対策は、各自治体での課題としてありますが、年長児が森などの課外での保育が中心となることで、空き部屋を活用し待機児童の保育を行ったり、森の保育園等の普及で待機児童の対応が確立しています。

保育園の選ぶ基準は、保護者の方々の教育的な視点で決めています。子どもたちが、中心であり、楽しく過ごせる場を求め、保育園を決定します。保護者の参加はいつでも可能であり、保護者と共に一緒に遊ぶ特別な日を設け、一緒に楽しんでいます。(クリスマス・祖父母の日等) 1ヶ月に1回、保護者が来てバスを掃除してくれています。今後は言語の発達に力を入れていきたいとおっしゃっていました。

★森に入ってみると

シーンと静まり返った森に子どもたちの楽しげな声。木々の木漏れ陽が、キラキラ輝いています。一人の男子保育士が、木に登って枝を払い、薪を見つけたとき火に火を起こしました。懐かしいき火の匂いに迎えられました。風の音、陽の光、炎の匂い、雨の気配、落ち葉の上を歩く感覚・・・を身体全体で感じることができました。

★好きなところで遊ぶ

バスから降りた子どもたちは、各々のリュックを背負って、友達や保育士と一緒に手を繋ぎ、森に着きます。リュックを降ろし、木登りを始める子、捕まえた虫を私たちに見せに来る子、ブランコの周りでは取



り合いがあったりしましたが、保育士の「集まるよ」という声にみんなが集まり、リュックからおやつを出しました。ニンジンやバナナ、パン等おうちから持ってきたおやつを喜んで食べていました。エネルギー補給をした子から、好きな所に行き遊びを始めます。小さい年齢の子たちは、保育士がとりだした絵本に耳を傾けています。おやつを食べながら話を聞いている子もいます。ある保育士は、木に登り、枝を切り取り薪にしたり、子どもたちが木から木にわたる一本橋(吊り橋のような)を作るための適当な枝を選んでいました。子どもたちは...というと、保育士が次にどんな橋を作ってくれるか「ワクワク」期待感を持った顔で、じっと木の橋で待っていたり、何度も途中までの橋でバランスをとって渡って遊んだりしていました。ちょうどよい枝を見つけてきた保育士は、つなげるためにロープを取り出し、鉋やナイフを使ってロープを切る作業を子どもと一緒にチャレンジ！枝と枝を縛り付け、橋はまた長くつながっていきます。その先で子どもがジャンプを始めると、そっと落ち葉を集めその上にジャンプ！

★ちょっとチャレンジしてみようかな

「子どもの遊びが、自然にさりげなくつながられているぞ。すごい」と感動する私が

いました。子どもの身体の動き、大きさ、使い方をしっかり理解し、そして、その子が自分の身体を十分使いこなせるよう、支えの木があったり、ちょっとチャレンジしてみようかなと子ども自身が思えるような場所に支えの枝があったり、ジャンプしてフカフカな落ち葉に落ちる感覚を感じられるようにしたり...子どもの身体の大きさと運動機能をどのように使うか調整していくのです。子どもが一人で渡れるように、子どもの手や足の運びを考え組み立てていくのです。「すごいぞ」と大興奮の私。これはあくまで子どもと保育士が遊んでいる一場面からの私なりの解釈なのですが...

★小さなヒヤリハットをたくさん体験

保育士の役割は何なのでしょう。子どもの力を信じ、子どもが子ども自身で考えて行動できるよう、黒子のような存在を感じた時間でした。

国の基本的な考えのもとで、自然の中で遊びが繰り広げられていました。自治体は子育てについてしっかりした目標を持っ

ており、保育園は、方針を示し、指導者(保育士)はその目標を具体化できる力を求められていると感じた森の保育園の保育でした。

小さなヒヤリハットをたくさん体験する中で、人間が本来持っている、危機察知能力を鍛え、直観力を研ぎ澄ませていくことも感じることができました。

★センスオブワンダー

自然の持つ神秘さ、美しさ、不思議さに出会うこと。風の音、炎の匂いを感じ、その中で仲間と一緒に遊び、自分で考え、行動し培われ、心と身体を育てる森の保育園。

自園に持ち帰り、私たちは何ができるか、どうすべきか考えるヒントをいただきました。目の前の子どもたちと職員(保育士)と共に、子どもを中心においた保育を作り上げていきたいと強く覚悟を決めた保育園見学でした。

<手作りのアスレチックを楽しむ>

